

# 御退職記念号に寄せて

―難波征男先生・池田肇子先生をお送りする―

末澤 明子

本号は、難波征男先生、池田肇子先生、お二人の御退職記念号です。難波先生は、一九八二年度に短期大学国文学科の総設メンバーとして佐賀女子短期大学より移られ、更に一九九七年度に人文学部日本化学科に移られました。人文学部開設の一九九〇年度、それまで非常勤講師を務めておられた池田先生は、英米文化学科に専任として就任されました。人文学部が改組した二〇〇一年度からは、共に二〇一四年度に定年の時を迎えるまで、現代文化学科教授として、二〇〇三年度に大学院人文学研究科が開設されてからは大学院教授として、また、難波先生は二〇〇五年度～二〇〇九年度、二〇一一年度～二〇一四年度に、池田先生は二〇一〇年度～二〇一一年度に学科長を務められ、学科のため、大学のために御尽力されました。定年による御退職後も、難波先生は二〇一四年度大学院契約教員（教授）として、池田先生は二〇一四年度～二〇一五年度人文学部非常勤講師として教育の任に当たられ、池田先生は本学生涯学習センター講師をも務めておられます。大学は両先生の御功績に対し、二〇一五年、それぞれ名誉教授の称号をお贈りしました。

難波先生、池田先生が学科長を務められた期間は、人文学部が大きく変化した時期でもありません。改組当初、現

現代文化学科、表現学科の二学科で開始した人文学部は、その後、英語学科開設（二〇〇三年度）で三学科、表現学科が言語芸術学科とメディア・コミュニケーション学科に改編、四学科になり（二〇一三年度）、国際キャリア学部・国際英語学科開設に伴い、再び三学科体制となりました（二〇一四年度）。現代文化学科は一貫して現代文化学科ですが、幅が広く、一般には必ずしも学科の性格が明確に受け止められていなかったように思われます。学科ではその性格を鮮明にすることに努めて現在に至っています。

両先生が学科長を務められた期間に学科の行った事業を思いつくまま挙げるならば、まず、キーワード「文化」の提示、カリキュラム改定、教員補充があります。大学案内等の学科説明冒頭に、シラバス掲載「カリキュラムポリシー」冒頭に「文化」をキーワードに「と書かれるようになったのは二〇〇八年度です。観光文化分野、交流文化、日本文化・国語教職分野の三分野を柱とする現代文化学科が、まとまりを欠く寄せ集めの学科ではなく、各分野が「文化」を追求することで密接に重なり合っていることを主張しているのが、このキーワードです。キーワードはカリキュラムにも反映、同時にカリキュラムを表したのがキーワードです。現代文化学科では、ほぼ四年毎にカリキュラムを見直していますが、二〇〇九年度、二〇一三年度の改訂は学科の性格を鮮明にする点で大きな変革でした。当然のことながら、あるカリキュラムを実施するには担当する教員が必要です。この数年に、現代文化学科では欠員も含めて分野の偏りをなくし、必要な専任教員を揃えるに至りました。

また、その他にも、学科独自のインスタンシッピング実施開始（二〇〇六年度）、学科ホームページ「現代文化学科 Today」開設（二〇〇七年度）、ハウステンボスに於ける新入生一泊研修開始（二〇〇八年度）、学科 Facebook 開設（二〇一二年度）、年度毎の現代文化学科ビジョンブックレット「We♡現代文化」創刊（二〇一三年度）等が挙げられます。ビジョンブックレットは、学科の性格を、人文学とは何かを学内外に示し、学科理解に資する点大で、キーワード「文化」と相俟って、この一兩年の入学者にも影響しているのではないかと思われれます。

両先生が学科長であられた時になされたこれらの事業は、勿論、学科教員がそれぞれ分担して任に当たり、実現したものです。しかし、専攻分野も、考え方も、行動様式も、性格も異にする教員たちが共同で事業をする時には、それを束ねる力が必要であり、また、何事も物事が実現するにはその準備期間があります。学科の新しい取り組みが、準備期間も含め、両先生が提案し、学科内外で調整を図り、交渉を重ねて御尽力下さったからこそ実現したと思うと、ただ感謝のほかはありません。御苦心も多々おありだったかと拝察しますが、何も口にされることなく、当然のようになさっていた以上のお仕事は多様な校務の一部です。それらを、教育・研究と共に、難波先生は、学外でも活躍されながら、一時体調を崩されたこともあった池田先生は、御自身の健康問題と御母堂の介護に直面しながら遂行されました。以下、両先生の研究・教育・社会貢献について少しく御紹介させていただきます。

難波先生は、九州大学大学院で中国哲学史を修められ、研究者として歩み出されました。その過程で、予期しない方向に進むことになったことが幾度かあったと話されたことがあります。しかし、それが結果として却ってよかつたのだとも。それは、難波先生がその時々々に機会を逃さず、新しい出会いを取り入れ、研究領域を拡大深化することができたからでもあります。先生の研究活動は儒学―陽明学―朱子学を軸に多彩です。著書・論文は多数ありますが、代表的なもの一つに『王陽明全集』九卷（共著、明德出版社、一九八六年）があります。また、儒学の新しい動向、儒教思想を現代のものとして新たに捉え返す和合学をいち早く日本に紹介したのは難波先生です。短期大学国文科時代に和合学提唱者、張立文氏（中国）を招いた際、学生がその講演を聴く機会をも設けました。編著『簡素と和合』（中国書店、一九九九）は和合学関係著作の代表です。儒学思想家としては、明代の劉宗周、十六世紀韓国の朱子学者、日本にも大きな影響を与えた李退溪に、そして、江戸時代以前の書院教育に多くの関心を持たれ、研究と社会貢献が互いに重なり合って展開しています。当然、それは日中韓に相渉り、中国や韓国で開

催される諸国際学会から招聘を受け、ほぼ毎年、複数回の研究発表を行われています。劉宗周関係論文の代表は「劉宗周思想における「微妄」の発見」(『九州中国学会報』49巻、二〇一一年)、李退溪研究の一つに二〇一五年に平凡社東洋文庫の一冊として上梓された李退溪書簡集、『自省録』があります。近年の儒学研究においては、朝鮮儒学、特に李退溪が国際的に注目されています。先生は、二〇〇八年以来、『李退溪論集』の編集委員を務め、また、九州李退溪学会会長(二〇〇九―二〇一五)をも努められました。九州中国学会幹事(二〇一一―二〇一四)その他と並ぶ学会活動の一つです。李退溪への関心は学界内外に広く、福岡県春日市の正行寺には二〇〇三年、李退溪顕彰碑が建立され、難波先生は請われて、顕彰碑入魂のために始められた『自省録』研究会の指導者となりました。東洋文庫の『自省録』は、異業種メンバーによる学際的研究会の成果が結実したものでもあります。江戸時代以前の民間の学校、書院も先生の関心であり、成果の一つが愛称「にんぶろ」を持つ科学研究費特定領域研究「東アジアの海域交流と日本文化の形成」に連なった折の「東アジア前近代の学校と教育に関する国際シンポジウム論集」(二〇一〇)です。難波先生は、学会以外にも民間諸団体で儒学について多数の講演をされています。それらは非常に高度なもので、仄聞するところでは、近く大阪に企業人のための塾を開設されるとのことです。現代の書院ともいえるもので、研究と社会貢献が重なったものでしょう。

短期大学国文科、人文学部日本文化学科・現代文化学科はすべて国語教職課程を設けています。難波先生は授業で教職に必修の漢文学を担当されました。短大では長く入試に漢文を出題していました。入試から漢文がなくなっただけでなく、学外で漢文教育の重責を担われたことのある先生は、漢文教育が如何にあるべきかをよく話されています。それは教職課程を持つ学科として大きな意味を持つものでありました。また、先生のゼミからは、留学生を含め、大学院進学者が多く、中国思想や書院に関心を深めて研究者として巣立って行った学生もいます。

難波先生の研究・教育・社会貢献は重なり合い、それらに接した学生、人々は貴重な経験をしたものであります。

池田先生は、現代アメリカ作家 Saul Bellow（ソール・ペロー、一九一五・二〇〇五）を主たる研究対象として来られました。九州大学文学部英文学科の学生であった時にアメリカの旬な文学事情としてペローを知ったとのことですが、当時の大学では現存作家が研究対象とされることはなく、論文として発表するのは、後に社会人入学された福岡大学大学院の修士論文からになります。以来、九州アメリカ文学会幹事（一九九二年～一九九八年）、日本ソール・ペロー協会理事（二〇〇〇年～現在）等の学会活動をされる中、『ソール・ペロー論文集1』（坂野明子・町田哲司編、大阪教育図書、一九九五）、『ソール・ペロー研究―人間関係と生き方の研究―』（半田哲也監修・日本ソール・ペロー協会編、大阪教育図書、二〇〇七）等の論文集、学会誌、紀要等に諸論文を発表して来られました。御退職後、それらをまとめ、二〇一五年には大著『二十世紀のラビーソール・ペロー研究』（開文社出版）を上梓されました。Alice Adams（アリス・アダムス、一九二六・一九九九）等のアメリカ女性作家に関するものをも含むそれら論考では、語り・語り手の問題も扱っておられますが、親子・家族、フェミニストによる批判、ユダヤ等をテーマとする御論考が多いように見受けられます。何が書かれているかの追求は伝統的、正統な文学研究の一方法ですが、今日的、現代的なテーマは現代文化学科らしく、輝いて見えたものです。池田先生は早くから、現代に着眼し、取り組んで来られたのだといえましょう。

公刊された御著書としては、他に大学生向け中級レベル英語教科書（共著）もありますが、大学の授業では、演習等でやはりソール・ペローを教材とされてきました。が、入学する学生も次第に変化する中で、新たに *Little Women*（『若草物語』）や *Anne of Green Gables*（『赤毛のアン』）等を採用されるようになり、カナダ・プリンスエドワード島への研修旅行も実施されました。これらの作品は大人になる一歩手前の少女を主人公としていて学生には親しみやすいものですが、書かれた時代の中で、また時代を超えて人間の生き方を追求することは大学におけるベラルアーツの意味を問うことも重なっているように思われます。池田先生御自身は学科長時代、学科ホー

ムページで、これらの作品を現在採り上げる意味を、それぞれの時代における女性の位置、研究動向の変化、女子大学の歴史と関連させて述べられたことがありました。Anne of Green Gables は生涯学習センターでも講じておられます。授業で扱われた作品には、その他、Pearl S. Buck (パール・バック) が大正時代の雲仙普賢岳大噴火に取材した「The Big Wave」(「ひなみ」) 等もあります。物に溢れた現代と対比させて考えるもので、東日本大震災が起る前からのことです。さまざまな作品との出会いは学生にとって貴重な体験でありました。学生に対しては、学業面でも学業以外の面でも熱心に指導され、池田先生の明るく愛らしい笑顔と親身な接し方、行動力は学生たちを惹きつけ、いつも慕われていました。英語教員となっていた卒業生が大学院に戻って池田先生の指導を受け、再び高校教員に帰ったのもその一例です。挫折し、目標を見失いかけていた学生が立ち直ったこともあります。

池田先生は研究面でも教育面でも現代文化学科を表す、大切な存在でした。

大学に於ける人文学の役割について議論の多い昨今、両先生の御業績を見たとき、人が若い時に、己の知らぬ、未だ経験したことのない世界に出会うことの大切さを考えずにいられません。両先生に接した学生たちは、意識するとしないとに係わらず、大きな影響を受けたことでしょう。それは教師の側の深い研究なしには成り立ち得ません。研究に基づいた教育の中から分析と総合の力―思考力、判断力、洞察力が養われ、そして自己と他者を尊重する独立した人間が育ち、また研究の後継者が育ち、長い時間を隔てても新しい世界を柔軟に受け止め、成長し得る人間が育つものと考えます。人文学部が人文学部らしくある幸せな時に、難波征男先生、池田肇子先生は御健究・教育を通し、大学・学科、学生、社会に対し、多大の寄与をされました。感謝と共に、両先生が今後とも御健勝であられることを祈りつつ、お送りする言葉と致します。